
ベストオブ学級崩壊

志波一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベストオブ学級崩壊

【Nコード】

N4490R

【作者名】

志波一樹

【あらすじ】

美少女系男子水野ミチルは、幼馴染み兼ガールフレンドの社長令嬢一ノ瀬エミリの暴走によって半ば強引に魔法学園に入学することとなった。しかも何故か女子校！最低最悪な教師陣や個性豊かなクラスメイト達の手により巻き起こる修羅場の数々…。今日も水野くんは魂をすり減らしながら、脳内ツツコミをかます！！作者のストレス発散的な超ドタバタファンタジックギャグコメディー。

水野くんのコメント「あ、ちょっと待って！ダメだってばうおあッ！
！アアアアア！！ぎゃああああー！！助け（ココからは血飛沫に

より読み取れません」

1 - S 学級名簿

私立美浜女子魔法学園高等学校
1年S組学級名簿（全十八名）

担任 鳴海リン教諭

副担任 一ノ瀬タミコ教諭

番号	氏名
【1】	秋山ツグミ
【2】	朝比奈アヤメ
【3】	榎本ホタル
【4】	小野寺カナタ
【5】	神木ナデシコ
【6】	久遠アズサ
【7】	佐藤マリ
【8】	志田アンナ
【9】	篠宮ヒメ
【10】	柴崎サエラ
【11】	高城ユキヤ
【12】	田中カレン
【13】	塚原ヒサコ
【14】	戸羽チヅル
【15】	巻カスミ
【16】	水野ミチル
【17】	三谷リサ
【18】	吉田シズク

（五十音順）

第一話『最終的にダメ押しは三回』(前書き)

主成分がただのストレス発散です。

心の広い方は、子供の遊びを眺める大人の気分でどうぞお付き合いください。

第一話『最終的にダメ押しは三回』

僕、死ぬ。

死を覚悟したことなら、今までにも何回かあった。でも、生を諦めたのは今回が初めてだ。

酷い。酷すぎる。

考えてもみてごらんさい。目の前に広がるのは女の園。四角い密閉状態の箱の中、見渡す限りの女、女、女。こんなとこにたった一匹放り込まれて、理性を保てるオスがこの世の中に存在するか。否。断じて否。…あ、いやまあ、居るだろうよそりゃ？でも気分と語呂の問題だから今はスルーね？そこらへんに置いといて。

さて、言っておきますが僕は男の子です。身も心も健全な男児です。という訳で僕は、とりあえず気絶するのでした。

という訳ってどういう訳かというとともな疑念もそこらへんに置いといてもらうとして（このようにして部屋は散らかっていくのだ）。

皆さん。どうかお忘れなく。僕は男なんです。今後物語がどう展開していくことも、皆さんだけは覚えていてくださいね。約束ですよ？大事なことからもう一度言わせてください、僕は男の子です。…ほんとに分かってます？心配だなあ。

テストをします。

僕の名前は水野ミチル。身長155？。体重43？。三年連続“

ミス美浜中”獲得。文化祭でのクラス劇の役柄、1年時シンデレラ（ヒロイン）、2年時白雪姫^{ヒロイン}、3年時眠り姫^{ヒロイン}。下駄箱に摩訶不思議召喚されるラブレターの割合　：　≡6：4。（志波調べ）

ではここで、皆さんに質問です。僕の性別は何だったでしょうか！？お答えください、せえーのっ！！

……。陰謀だこれは何かの陰謀だ。

って、ちよつ引つ張んな…何！？今モノログ中…ッ！？インベ―ダーじゃねーよ！！何が言いたいんだよ！？

あん！？そんな可愛い顔で怒っても可愛いだけだあ！？ふざけんな、バカにしやがって！！

……。えー只今、情報トラブルにより、文字列に不適切な表現等が見受けられましたことをお詫び申し上げます。

ごほん。じゃあこの辺で切り上げるとして、最後にダメ押しでもう一回。

僕は男です。

…シッコイオトコツテキライ。

あんたはすっこんでろッ！！

第一話『最終的にダメ押しは三回』（後書き）

前作の設定改変に予想以上の時間を浪費しているため、つなぎの一作を公開することにしました。

第二話『悪いことは2、3度どころか5、6度位重なる』

僕が今、女の楽園の中で気絶している理由。意識がブラックアウトしている間にでも説明するとしましよう。…いや、興味無いとかそーゆーのは無しの方向で。この小説、読者参加型でやっていきたい…らしい…作者曰く。

兎にも角にも、ことは前年度の冬休み、僕が中学3年時にまで遡ります。

「僕、決めたよ。自分の力、試してみる。やれること、全力でやりたいんだ」

夕暮れ時の公園。僕は静かに決意を口にした。

「…だったら、あたし、ついてく」

「エミリ…」

一ノ瀬エミリ。僕の幼馴染みにして彼女。頭も体力も顔も人並みな一方で、社長令嬢なお嬢様だったりする。

「ミチルが教えてくれたら、馬鹿のあたしも、都内トップ校にだって合格出来る。それじゃ駄目？」

「…正直、グズると思ってた。そっか、そうだね。受験まで残りの期間、二人一緒に受かることだけ考えよう」

生まれがいいだけあって、如何せん強情と言うべきか、意地っ張

りと言つべきか、我が儘な面を持つエミリ。ただ僕自身、そんなお嬢様特有の浮世離れした雰囲気にも惹かれてる節があるため、一概に短所だと言いつけることはしたくない。

欲しいものは絶対欲しい。なにがなんでも二人同じ高校に進学する。らしいといえ、いかにも一ノ瀬エミリらしい選択だった。

その日の内から、猛勉強が始まった。あまりに勉強し過ぎてゲシユタルト崩壊を起こした僕らは、勉強つて何？と何度も思った。そして、勉強が食事・睡眠に続く生理的欲求に仲間入りしようかという頃、試験の日はやって来た。

結果。エミリは落ちた。

前夜ギリギリまで暗記作業をし、朝寝坊したエミリ。最初の国語は受けられず、次の数学。慌てていた故、コンパス三角定規を自宅に忘れる。唯一自信のあった英語。始めのリスニングに気を取られ、名前と受験番号の記入を失念。理科。冒頭の問題がハイレベルな難問だったため飛ばして解いたところ、見事に解答ずらし炸裂。最後まで辿り着いたところで気付き、修正を試みるも、チャイムが鳴り敢えなく撃沈。社会。テスト開始直後気分が悪くなりトイレへ。前の晩の験担ぎで食べたカツを戻し、早退す。

これが後にエミリ本人から聞いた、受験の全て。自己採点、36点（5教科合計）。

明暗分かれて、合格した僕。意図せずして首席、特待生の称号を手にするも、喜べるはずがなく。

「こんなの、許せない。認めない、納得いかない、絶っ対いやあッ！！」一ノ瀬ファミリーの圧倒的権力及び財力をもって、僕の合

格通知と二人の受験記録はなんてことはない、捻り潰された。

そして僕らがこの春晴れて、入学せしめたのがココ。その名も、私立美浜女子魔法学園高等学校（経営が一ノ瀬の関係者）。

魔法……魔法！？え、何？女子校って男子も入学しようと思えば出来んの！？そーゆーもんなの！？

僕の人生何度目かのスカートを、春風が優しく揺らした。

第三話 『お月様はお置きしません』

という訳でここは保健室。という訳ってどういう訳だ（既視感）？いやだな皆さん。僕気絶してるんですけど、忘れてました？

という訳で彼女は三条さん。という訳でってどういう訳だ？いやだな皆さん。彼女は……………すみませんでした。

こほん。気を取り直して、彼女は美浜女子魔法学園の校医、三条レイラ先生。やっぱり治癒魔法とか使うのかなあ？

「ねえ」

「はい？」

三条先生話しかけてきた。いやね、沈黙がいいわけじゃないけどさ？ガン見は、ガン見はやめて穴あくから。アレだよ？ファンタジーだからってレーザービームとか出て来ても洒落んなんないよ？

「君さ、男の子ってホント？」

ぶはッ！！だから言ったじゃん！昨日！入学式の後！職員室で僕がどれだけ恥ずかしい思いをしたと思ってるんですか貴女は！

「その通りですが」

「か、可愛い……」

あ、駄目だ。この人アレだ駄目な人だ。

「君、先生と一発いって見ない？あら、あんなところに偶然ベッドが！」

うん、そうだろね。保健室だもん。

「一発？何をですか？貴女の脳天に拳骨一発ですか」

「ふん、可愛い顔して言ってくるじゃない。生意気な子にはお仕置きよ、月に代わって。ふふふ、ああしてこうして、そうして、どうして、誰が、何を、いつ、何処で」

「先生、熱測ったほうが良いです。絶対」

ガツシャアーンツ！！

保健室のあらゆる備品を手に手に、三条先生が襲いかかって来た。ホラー！？何！？何がここまで彼女をキレさせた！？

逃げる僕。逃げる逃げる逃げる。

彼女がやって来たのは、この時であった。

「失礼します」

ノックの音がして、誰かが保健室のドアを開けた。

「……何、やってんですか」

入室しようとする不自然な体勢のままフリーズした女子生徒

もっとも生徒は基本みんな女子だが　　が口だけを動かして問う。

「うーん……お仕置き？」

訊くな、こつち見んな。

キャスター付の椅子に片足を乗せた状態で、カウボーイよろしく包帯を構えた三条レイラ女医が、体重計の表示部分を盾にした僕に笑いかける。

「先生に、水野さんを迎えに行くよう指示を受けたのですが」

呆れた様子でそう言うのは、今日決まったばかりな僕のクラスの級長さん。確か、名前は志田アンナ。

「志田さんごめん、今行く」

そう言っただち上がった僕は、三条レイラには見向きもせず志田さんに続いて保健室を後にした。

私立美浜女子魔法学園高等学校。

実は僕らの生きるこの世の中では、魔法というものは珍しくはあっても驚くものではない。カリキュラムに魔法学を組み込む学校も、ポツポツとはあるが最近は増えてきている。

とは言つもの、珍しいもんはやっぱり珍しいもんなわけで……。
例えばクラス分け。これは入学試験の際の学力テストの成績で決まる。僕は1 - Sだけど、これは十や二十もクラスがあるってことじゃない。何のランクのつもりか知らないけどS・A・B・C・Dの5クラスあつて、要するに僕はS組。あとちなみに言つとくとエミリはB組。僕と同じクラスじゃないのに相当ご立腹の様子。僕はというと、正直内心ほつとしている。薄情かな？でも自分しか見えてないエミリのことだ、何かの拍子に僕が男だつてバレかねない。下手したら入学と同時に退学だ。…内心の奥にもう一つ本心がある。よくある物語から、ここで軌道がずれたのだ。好奇心も無いことはないけど、主人公としてはこの先どういう展開が待っているのか予想がつかず、非常にやりづらい。ていうか、こういうこと此処で喋っちゃ不味いだろ。手遅れ？知るか！僕は操り人形じゃないぞ、離せ作者！！僕は自由になるんだ！！I can fly！！……
自粛。

話は戻つて。

もう一つの例、我が校が他校と決定的に違う例をあと一つ挙げるとするなら、それは教師じゃなからうか。

「おう、おかえり志田。サンキューな」

まだまだ発展途上の魔法学を広めるべく、魔法学教諭の採用には教員試験とは全く別のルートが国家レベルで適用されている。…まあ理屈はともかく、ことはそーゆー問題じゃない。なぜなら。「…あッ！！畜生やられた。あゝ水野はテキストに空いてる席に座つてちよ。……おし決まった会心のいつちげきいゝ！！えーつとこころで俺何の説明すんだつたっけか。まいいや、志田あ、どつかそこからへんのファイルのどれかに多分今日の資料入つてつからさ、お前それ説明してやつてくれない？頼むわゝ。……来た来た来た来た！！アイアムwinner ああー！！ひゃあ素材ゲットん」

……それは人格的問題だからである。

うちの担任は、教卓の上で胡座をかき、ジャージ姿で煙草を吹か

し、ひたすらゲームに勤しんでいた。

名前は、えー……鳴海リン。俺とか言ってるけどあの人の、生物学的に多分女。自信ないけど。

「ご、う、せえーい！！きゃー一週間の努力の結晶！！」

なんてこった。カムバック、平穩！

「……午後の予定は以上のものでありますから、皆さんで各自責任を持って行動する事にしましょう」

「はい」

「ああああーッ！！死んだッ！！またあつこからやり直しかよ〜」

第四話『反面教師』

「いやあー皆さん。俺はこの先一年間でめえらの担任になるに当たって、言って置かなきゃならんことがある。

俺は自分のやりたい事しかやらん。勉強したい奴は勝手にどうぞ！
A組以下、他の4クラスの担任はみんないい奴だ。分からない事があつたら遠慮せずアイツらに訊け！

もうこの時点で頭の良いS組諸君は分かつてるとは思うが、俺がココの担任をやっている理由！！それはズバリ頭の良い生徒じゃないと、俺の元にいる限り墮落していくのみだからだ！！
以上！！諸君の健闘を祈る」

と、これっぽっちも祈る素振りを見せない鳴海先生が言った。

「ちなみに」

まだあんのかい、以上つつつたる。

「俺の好きなモノはサバイバルだ」

やれつてか、サバイバルやれつてか。『自分のやりたい事しかやらん』つてそーゆー意味？

「嫌いなモノは勉強と餓鬼だ」

……先生、世間ではそれを職務放棄と言つのですよ。

「それから」

もういいッ！！終われや！！終わってくれや！！これ以上絶望的状况を目の前に突き付けるな、刺さる！！目に刺さる！！

「水野」

「はひい！？」

「ナイスツツコミ！勇者ミズノはレベルが1上がった。信頼という名の『鳴海の依存』を手に入れた」

いらねえエエーッ！！クーリングオフ！！金払ってでも返品する

わ!!

てか今のって……

「読心術だ。昨日師匠に教わった」

「師匠!？」

「コードネーム『シバの女王』、なにやら矢鱈キャンキャンと口煩い、小者臭のするツツコミ属性の奴には効果覿面らしい」

シバ……あんやろう、僕を馬鹿にしがつて。さては『ベルキス』聞いたことないな!？スゲーんだかな!感動すんだかな!!!
ってあーあーあーあー、クラスメイトみんなコツチ見てんじゃん!
!目立ちたくないのにい!!

僕の当面の敵は鳴海リンに決定した。

で。

鳴海先生の投げやりな話と、志田さんの消極的な説明を統合し、簡単にまとめるところだ。僕達はこれから、まず魔法初心者として自分の魔法の方向性を正確に位置づける必要がある。知ることによって初めて、形のあやふやなものを、現象として認識する事が可能になるのだ。

魔法の方向性ってゆーのは、まあぶっちゃけファンタジーでお馴染みの火属性とか光属性とかなんかそーゆーの。でも厄介なのが、単純に火属性なら炎ボワーって意味じゃなくて、あー……精神状態?アイデンティティー?みたいな、その人特有の意思決定の判断基準?が、てかそれに基づいて形成される情報レベルでの思考回路の形状をある一定の基本パターンに配属つでえーい!!オボログシャベボロロロ……!!

無理もついいやめた。

一つ、レディスト。炎、爆発、熱などに形容される、アクション傾向顕著な魔法師。魔法技能保有者の意。魔法使い、マホウシから派生した新出語句である。

一つ、プリスト。水、氷、治癒などに形容される、考察傾向顕著な魔法師。

一つ、イエリスト。地、風、雷などに形容される協調傾向顕著な魔法師。

こういう性格がこの分類、と決まっているわけではないけど、無意識のうちにその人が持つ思考回路の、どの位置にどんな判断材料を配置するか、この法則性で振り分けられるわけで、まあ、ある程度その人の人となりを知っていれば、なんとなくわかる、そんなようなものだ。

ほとんど全ての魔法師が、大まかにはこの三つに分けられるそう
だ。ただ、例外的に二つの属性を併せ持つバイリンガルや、それが
三つの場合はトリリンガルと言った者もいる。これらを総称して、
多言語話者の意を借りてマルチリンガルと呼ぶ。単一属性保有
者はモノリンガルと言うが、これは余り使われないのである。
ちなみに、鳴海先生はトリリンガルなんだとか。しかも爆破系が
好みらしい。……恐怖。

さて。

今僕らが居るのは、実習室か訓練室みたいな所。暗幕が閉め切られ、
中は薄暗い。何というか、神秘的な感じがする。まあ、“神秘的”
の原因は丸出しなんだけど。そう。これ、このサークル。魔方阵？
いや、表記は魔法陣かな？ほんとうにこんなのあるんだね。

さつきから、クラスメイト達が一人ずつあのサークルの上に立ち、
何か説明を受けた後、何かして、教室へ戻っていつてる。出席番号
順だから、僕の後ろには二、三人いるかいな。

はあ……。

僕が今願うことは唯一つ。どうか、反則技が炸裂して、最強な主人公スキルが身につきますように。切実な願望。

「水野さん」

「はい」

き、来た！！僕は汗ばんだ手の平を握り込み、緊張のままに一步を踏み出…

「ちょっとそこの電気消してもらえる？」

「……はい」

「……へ？」

「ミラーボールはスイッチ切れれば止まるから。その壁のボックスを開けば暗幕と照明の操作スイッチがあるでしょ？」

「……あ、ほんとだ」

「ね？少し考えれば分かる事なんだから、パニックになつて大きな声を出す前に、まず考えるの。いい？分かった？分かった時はなんて言うの？」

「……わかりました」

「そうそう。……ふう。じゃあ頼んだかね、一ノ瀬先生」

一ノ瀬タミコという女性はまず第一にわがS組の副担任であるが、僕としては、エミリン家のドジっ娘属性箱入りねーちゃんという認識が先立っている。

時と場所を選ばずに、ランダムで幼児退行するというなんともはた迷惑なスキルを保有していて、永遠の七歳児。素直な性格で、妹のエミリとは似ても似つかない。

「……こほん！では施術の前に説明を少し」

「はい」

やっとかさ本題に入れた。

「これから、検査用に波長の調整された魔力を、水野さんの魔力回路に流します。回路は、接地面を経由して床の魔法陣に接続され、発光するように設計されていて、光の色が赤ならレディスト、青ならブリスト、緑ならイエリストです」

だとすれば、僕がバイリンガルだった場合、すでに十分あり得ると踏んでいる、レディストとブリストのバイリンガルならマゼンタ。ブリストとイエリストはシアン、イエリストとレディストはイエロー、ってカタカナ多ッ！！

そして、最も回避したい最悪のケースはホワイト。つまりはトリリンガル、ということになる。

僕が頭の中で光の三原色を点滅させている間に、タミちゃんの方では準備が完了したようだった。

「えっと……、ととのいました!」

謎かけする気がっ!!

「……し、白?」

乾いた唇を微かに動かしながら、息だけでそう呟いた。僕は落胆していた。まさか、まさか本当にトリ……

「ッ!? きゃあああああああーっ!」

……。彼女の場合は落胆では済まないらしいが。

「こ、これは……」

ミラーボールじゃないからね。一応言っとくと。

「そんなことつて……、でもこの無色透明の発光は間違いなく……クリエスト!!」

はい。出ましたクリエスト!!

はい。来ました全っ然知らないヤツ!!

「よりによってどうしてミチルくんが、……はっ、水野ミチル!! まさか四十年前第三次世界大戦を終結へと導いた白き英雄、クリエストMs・ミツチエルとの間に隠された因果関係が……!?!」

そしてお前はまたテキトーに設定作ってんじゃねえ!!

あー畜生!

本日をもちまして全世界はわたくしの敵におまわりあそばしました。ちゃんちゃん。

……絶対こーなると思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490r/>

ベストオブ学級崩壊

2011年10月7日15時26分発行